

伝道者の書1章14節「日の下と御子の中」

1A 日の下における業

1B 晩年の後知恵

1C 主から離れた経験

2C 死で終わる世界

2B 成果の空しさ

1C 知恵による悲しみ

2C 快樂の愚かさ

3C 死後の名誉

4C 後継者による台無し

2A 御子の中にある命

1B 永遠の命

1C 御父と御子との交わり

2C 復活における報い

2B 主にある働き

1C 無駄にならない働き

2C さらに優れた喜び

2B 生涯の終わり

1C 主にお会いできる日

2C 報いを受ける日

本文

伝道者の書 1 章 14 節を開いてください。私たちは今日から、伝道者の書を読んでいきます、今日は1章から4章までを通読します。「私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。」私たちはこれまで箴言を学んできましたが、伝道者の書を読むと、本当に同じソロモンが書いたのか？と思ってしまうほどの大きな違いを見ます。なぜ、そこまで悲しみと空しさ、苦みに満ちた晩年でありました。

ソロモンは、その若い時に、父ダビデの死後、その大きなイスラエルの国を治めなければならぬ時に、主に、「あなたに何を与えようか。」と尋ねられました。ソロモンは、民をさばくための判断力を下さいと主に願いました。その願いは主の御心にかないました。主は、彼が長寿を求めず、富を求めず、たださばきのための判断力を求めたので、それを与える、と言われました。そして、願わなかったもの、富と誉れを与える、そしてあなたが主の命令を守るなら、長寿も与えようと約束されました(1列王 3:11-14)。それで、ソロモンは、イスラエルだけでなくその当時の国々の中で、比べられないほどの知恵のある者となり、富も与えられ、名誉と栄誉が与えられました。

これは、イエス様が弟子たちに語られた約束と同じものです。「マタイ 6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」ソロモンは、神の立てられたこの国を、神に与えられた王の務めを果たすために、知恵を求めたのです。つまり神の国とその義を、他の富や名誉や、長寿よりも大事なものとして求めました。ゆえに、主は、これらの富や名誉もまた加えて与えてくださいました。

ところが、ソロモン自身が次第に、その優先順位があべこべになっていきます。主との関係よりも、主の与えられたこれらの付随物に注目してしまったのです。主ご自身を第一としてくださった知恵ですが、彼は知恵そのものを求めていきました。彼は神に対する信仰は捨てていませんでしたが、主ご自身とその賜物とどちらが大切かと言えば、もちろん主ご自身です。けれども、賜物にしかすぎない知恵を主から切り離して求めていきました。これは、私たちキリスト者がいつも持っている霊的危機です。主との関係よりも、主の下さる賜物に抛り頼んで生きてしまう危険性です。

それで、世の中のことを知りすぎて、ソロモンの心は疲れ果ててしまいました。そして彼は快樂に走ります。しかし、その愚かさをすぐに知ります。それから、事業にも精を出しました。ところが、それもすべてを完成させた後で空しさが残りました。その後継者である、息子のレハブアムがきちんとその事業を受け継げるか、全く保証はありません。こうして、彼の心はどんどん空しくなり、生きていることに対する苦みが出てきました。その言葉が、1章 14 節です。「私は、日の下で行なわれたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。」

1A 日の下における業

1B 晩年の後知恵

ソロモンは、この伝道者の書を若者に対する言葉で終えています。「あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また、「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。(12:1)」と言いました。年が若ければそれだけ、将来に対する希望を抱いています。これこれを行なえば、新たな道が切り開かれるという期待をもって、その事業に邁進します。けれども、ソロモンは人生の最後に差し掛かり、後知恵を持っています。ソロモンこそが、若者が追求するあらゆることを既に行なった人物でした。知恵や学問のこと、事業のこと、快樂のこと、富を求めること、「これをすれば意味がある」と人々が期待するものは、すべて行ないました。その全てを行なった後で、「空の空。伝道者は言う。すべて空。(12:8)」と言ったのです。

もし私たちが、何かを行いたいと思っていれば、キリストとの関係抜きでこの地上で起こっていることを見極めたソロモンの経験から来る知恵には耳を傾けるべきでしょう。彼はあらゆることをした人物です。その行く先は、必ず「空しさ」だけなのです。

1C 主から離れた経験

なぜソロモンは空しくなったのか？主との関係を第一にしなかったためです。主に与えられたも

の、その務めは行っていました、主ご自身とのつながりから次第に離れていました。この書において「神」つまり、エロヒムという言葉を使っています。けれども、旧約聖書に出てくる主の名であり、「ヤハウェ」は出てきません。箴言を見てください、たくさん新改訳で太字の主、ヤハウェが出てきます。ヤハウェは、私たちに個人的に関わってくださることを約束する神の名であり、私たちの必要そのものになるという恵みの名前です。ところがソロモンは、世に関わりすぎたためその関わりがなくなってしまいました。それで自分の主が単なる「神」でしかなくなってしまいました。私たちもいつの間にか、自分がしていることで精一杯になって、それで主との関係が、単なる漠然とした「神」エロヒムとの関係になってしまっていないでしょうか？

2C 死で終わる世界

そして、ソロモンのこうした霊的後退、霊的に後ずさりしてしまった最も大きな原因は、「**日の下**」という言葉にあります。彼は、3章11節に「神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。」と言っています。けれども、その永遠に目を向けるのではなく、この地上で観察できる、日の下にあることのみを焦点を合わせて語っています。ですから、目に見えるものだけを追っていき、肉体の死と、その後の地上で起こっていることだけを見ているので、それで絶望しているのです。死後の命についての考慮がないで、今の命を見ているので、絶望しか出てこないのです。

2B 成果の空しさ

1C 知恵による悲しみ

ソロモンは、「私の心は多くの知恵と知識を得た。(1:16)」と言っています。けれども、その結果、「**実に、知恵が多くなれば悩みも多くなり、知識を増す者は悲しみを増す。(1:18)**」と言っています。この世で起こっていることについて、私たちはこれまで以上に数多くの知識を一般人が得ることができるようになりました。それで調べます。けれども、その情報の多くが自分を落ち込ませるものです。調べてその真相を知れば知るほど、お花畑のような美談ではなく、どろどろした現実を見せられるからです。悩みが多くなり、悲しみを増すのです。

しかし、キリスト者であれば、その信仰の目で見れば、そうした悩みや悲しみの中にあっても、それでもそこに主がおられるという希望を持つことができます。キリストの十字架によってその現実を見れば、そこにも希望があることを見ることができます。しかし、その視点がなければ絶望しかないのです。

2C 快楽の愚かさ

ソロモンはそれで、快楽を味わってみました。けれども、「笑いか。ばからしいことだ。快楽か。それがいったい何になろう。私は心の中で知恵によって導かれているが、からだはぶどう酒で元気づけようと考えた。(2:2-3)」と言っています。いかがでしょうか、クリスチャンの集まりではお酒が出ないからつまらない、もっと楽しくクリスチャンでない人とも、お酒を交えて付きあいたいと思ってしまうかもしれません。けれども、酔った後に来る、あのどうしようもない空しさは否定することがで

きないです。

3C 死後の名誉

そしてソロモンはあらゆる事業に関わります。そして、知恵ある者と愚か者の違いを話します。箴言で彼自身が教えていたように、知恵ある者が愚か者よりも優れています。けれども、ここで伝道者の書では、死んだら同じ結末になるではないか、と言っているのです。知恵ある者であっても、墓の中に入ってしまうえば、人々の記憶はそんなに長く続くことはない。愚か者との間には、墓においてさほど違いがない、ということでもあります。

4C 後継者による台無し

そして、せっかく成し遂げた事業も、その後継者いかんによって、全く無に帰せられてしまうこともあります。ですから、何か永続するものが日の下にはないのです。そしてソロモンの観察は正しいのです。アダムが罪を犯して、土地が呪われたものとなったのですから、日の下で起こっていることに新しいこと、永続するものはないのです。

2A 御子の中にある命

1B 永遠の命

1C 御父と御子との交わり

ですから、日の下にあるものは全て空しいのです。しかし、その人生とは対照的に、神は新約聖書において希望の約束を与えておられます。「1ヨハネ 5:11-12 そのあかしとは、神が私たちに永遠のいのちを与えられたということ、そしてこのいのちが御子のうちにあるということです。御子を持つ者はいのちを持っており、神の御子を持たない者はいのちを持っていません。」日の下にある業ではなく、御子の中にある命です。この地上で成し遂げる業ではなく、キリストの中にいるという交わりです。その交わりの中に永遠の命があり、死んだ後の希望があります。

パウロは、ピリピ人への手紙の中で、御子の中にある命についてこう話しました。「ピリピ 1:21-23 私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。しかし、もしこの肉体のいのちが続くとしたら、私の働きが豊かな実を結ぶことになるので、どちらを選んだらよいのか、私にはわかりません。私は、その二つのもの間に板ばさみとなっています。私の願いは、世を去ってキリストとともにいることです。実はそのほうが、はるかにまさっています。」彼は生きることはキリストである、と言いきりました。この方の中にいること、この方が私の内におられることが自分にとって生きることになっています。そして日の下ではなく、日の外、つまり死後の命もしっかりと信じています。ですから、死ぬこともまた益であると、死んだらキリストと共にいることなのだ、というはっきりとした希望も持っています。

ゆえに、彼は喜んでいました。伝道者の書には、あらゆる労苦とあらゆる仕事の成功を見たら、それは人間同士の妬みに過ぎないことを観察して、「むなしく、風を追うようなものだ。(4:4)」と言

っています。しかしパウロは、牢獄にいる間、彼をおとしめるため、妬みと争いをもってキリストを宣べ伝える者たちもいたことをピリピ人に伝えています。「つまり、見せかけであろうとも、真実であろうとも、あらゆるしかたで、キリストが宣べ伝えられているのであって、このことを私は喜んでいきます。(1:18)」と言っています！キリストが自分にとっての全てになっているから、神の国の広がりがどのようなものかを知っているから、キリストの名を利用して人と争っているという醜さを見ても、全く異なる視点から同じことを眺め、なおのこと喜んでいくことができたのです。

2C 復活における報い

私たちが死後の命、そして復活の希望を持つことによって、日の下における不条理に見えることにも耐え忍ぶ信仰が与えられます。「ヨハネ 5:27-29 また、父はさばきを行なう権を子に与えられました。子は人の子だからです。このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。」甦りによって、人は報いを受けます。善を行なった者は、永遠の命の報いを受けます。そして、悪を行なった者は滅びという報いを受けます。

ソロモンは、知恵のある者、愚かな者は、墓に入れれば同じように忘れられると言いました。また虐げる者が権力を持っている姿も見ました。これならば、死んだほうがましである、いや生まれてこなかったほうがよかったのだ、と言っています。そうです、そのような不条理は日の下におけるものだけを見たら、確かに空しく、苦々しくなります。しかし、私たちの主イエス・キリストは甦られたのです。そして、キリストを信じる者も、死んでも甦るのです。そして、その甦りの時に地上で行ったことについて、報いを、その褒美を主からいただくことになります。

2B 主にある働き

1C 無駄にならない働き

コリントの教会の一部に、死者の復活を否定している教えが入っていました。それでパウロが、第一の手紙で反論を書いています。「もしキリストがよみがえなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。(15:17)」キリストの復活がなければ私たちの信仰は空しいのです。そしてパウロは、死者の復活があることをしっかりと論証し、最後に、15章の最後の節ですがこう結論づけています。「1コリント 15:58 ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあつてむだでないことを知っているのですから。」ソロモンは、私たちの労苦が無駄であると言っていました。しかし、復活による永遠の報いの希望があるので、私たちの労苦は主にあつて決して無駄にはならないことを知っています。

私たちは、キリストにあつて愛の行ないをします。その行ないによって、必ずしも人々が神に立ち返ることがない、むしろキリストに反抗してしまうこともあります。しかし、それは関係ありません。キリストの愛に満たされて、その愛をもって行動に移すこと自体に意義があるからです。その行な

いそのものに報いがあります。私たちの存在意義は、その成果にあるのではなく、ただキリストご自身の中にあることであります。

2C さらに優れた喜び

私たちはキリストの死と復活を、何か昔に起こったもののように考えません。キリストの死と甦りは、まさに私たちの生活そのものであります。「ピリピ 3:10-11 私は、キリストとその復活の力を知り、またキリストの苦しみにあずかることも知って、キリストの死と同じ状態になり、どうにかして、死者の中からの復活に達したいのです。」キリストの苦しみの交わり、それからキリストの復活に達します。問題は、何をしているかではなく、そのしていることを通してキリストを知っていくのかどうかであります。その知識こそが、私たちの喜びであり、キリストを知ることそのものが、自分の命なのです。

2B 生涯の終わり

1C 主にお会いできる日

そしてその生涯の終わりに、御子の内にいる者は期待に胸を膨らましているのです。ソロモンは、死においてすべては空しいと言いました。パウロはどうでしょうか？彼は間もなく、ローマ皇帝ネロの前に立ち、死刑判決を受けます。「2テモテ 4:6-8 私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」主にお会いできる日が近づいています。顔を顔を合わせる時が近づいています。

2C 報いを受ける日

そして、「良い忠実なしもべだ。あなたは、わずかな物に忠実であったから、大きな物を任せよう。」と呼ばれるのを待っています。パウロは、義の冠を受けることを待ち遠しいと思っています。この時に報いを受けるからです。ですから、私たちが日の下で生活するのか、それとも御子の中にいること自体を喜んでいるのか、そして、していることに頼るのか、御子の中にいるという状態、その交わりに頼むのか、そのことが私たちに問われています。

最後に私の証しを分かち合います。私は若い頃、献身をして御言葉を宣べ伝えることに生涯を捧げたいと願いました。「死ぬ時に、後悔しないでいる時、御言葉を伝えてきたということであれば後悔しないだろう。」と思いました。そして今、その決心の中に今も生きています。

けれども、偉大な説教家がどのようにその人生を終えたかを思う時に、主への恐れが起こりました。それは、その老齢の説教家は、まるで新しく生まれたばかりの者であるかのように、自分が天の中に入ることを、それを単純に願っていたのです。チャック・スミス牧師は、自分の名が天に書

き記されていることは、自分の行ないによる義ではなく、神の下さる信仰による義なのだと言いながら、自分の死期が近づいていることを知って、これまでの数多くの罪の重さを感じながら、それでもキリストがその罪を赦してくださったことを思って、涙を流して説教していたのを覚えています。そしてロイド・ジョーンズは、「説教者は、説教ができなくなってから試される。」と言いました。説教をするという活動に拠り頼むのではなく、神と自分との関係だけが最後に残ると言いました。

それで私は自分の大志を変えました。少年よ、キリストにあつて大志を抱けと言ったのは、クラーク博士ですが、それは今からこういう大志を抱きたいです。「私は罪赦された罪人です。イエス様、こんなどうしようもない罪人を救ってくださって、ただキリストの十字架によって救ってくださって、ありがとうございます。」と言って、死ぬことです。自分のしていることは、主から与えられたすばらしい務めです。しかし、罪赦された罪人として主の前に出ること、これを目標としたいと思います。イエス様は言われました。「ルカ 10:20 だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」